プロローグ

田中スバルは大愛闇梨（だいあいじゃり）である。

無限に広がる大宇宙にあって、『大愛闇梨』の称号を得たのは、彼ただ一人。

太陽系、銀河系を超え、膨張し続ける宇宙の端にも至らんとする人類、またその途上で出会ったありとあらゆる生命体においても成し得なかった、史上初にして最後と言われている、大愛闇梨なのである。

千の種族に万の愛を説き、年齢も生態も性別も、時間さえも超えて愛を体現することにより、大愛闇梨は成る。

奇跡という言葉では陳腐にすぎる偉業の、ほんの一部を、大愛闇梨の許しを得て記す。

第一部　斜陽

「愛闇梨に問う。人類種の『親』が『子』に、『子』が『親』に抱く『愛』というものが、妾（わらわ）には理解できない。遠く離れた我が星に駐屯する人類種は、多額の費用をかけてまでも親に、あるいは子に対してメッセージを送っている。場合によっては、自身が帰る方が早い場合すらあるのに、手紙を書く者すらいる。まったくもって非合理で不可解だ。何故に人類種はこれほど無駄なことをする？」

大愛闇梨に至るべく、過酷な修行の旅を続ける田中スバルは、ある惑星に降り立った。そこは地球に似た環境を持つが、星の覇者は人類に近い種ではなく、我々地球人から見れば異形の存在であった。

簡素にして荘厳。謁見の間は地下深くの岩盤を、気が遠くなるほどの時間と労働力をかけて穿ち、磨き上げている。科学的な岩盤エンジニアリングの技術を持たないこの種族にとって、それは純粋に手作業による成果の集積であり、数えきれないほどの命が対価として捧げられてきたことは想像に難くない。

彼に問いを投げかけたのは、『蟲』の女王。通称『蟲』と呼ばれる彼女の種族は、地球における昆虫に似て、蜂と蟻を掛けあわせ、蟷螂の鎌と節のある身体、そして飛翔するには頼りない小さな羽根を持つ。特に女王たる彼女は、頭部を覆う毛に、冠にも見える黄金の模様が輝き、感情を露わにしないはずの複眼にもかかわらず、知性と理性の光が宿り、他の『蟲』とは明らかに一線を画している。その生態も昆虫に近く、頂点に君臨する女王を親衛隊が守り、労働階級が建設や狩猟などを担う。そしてそれら全てが、女王により産み落とされた無数の卵から生まれ出た個体なのだ。

女王はじめ、『蟲』は人類のような声帯を持たない。声を発する必要性がないのだから、あろうはずもない。しかしながら、女王は女王以外の全ての『蟲』を司り、指令を与える必要性から、他の個体には見られない明敏な頭脳と優れた知性、また女王のみが持つ第三の触覚器官とその奥の脳髄にある精神的感覚器官を、生まれながらに稼働させることができる。

そうした器官により、顎をこすり合わせる音や、羽根を震わせることにより生じる音で、女王は言葉を連ねる。勿論のこと、同種以外の傍観者には、それが言葉であることすら理解することは叶わない。異種にあっては、愛闇梨たる田中スバルが唯一、その愛を以ってして、意図を汲み、コミュニケーションを図ることができるのである。

何故なら、彼がやがて大愛闇梨となる、宇宙で最も愛に近い男だからだ。

田中スバルは、涼やかな声で『蟲』の女王に応えた。

「親が子に、あるいは子が親に抱く愛情は、人類種にとって最も基本的で、かつ、その生において、最初に触れる愛と言えるでしょう。残念ながら、例外も少なくはありませんが」

「妾は子について、何の感情も持たぬ。生まれ出たその瞬間から、我が子らは役割を果たす下僕。外敵を討ち、食料を確保し、砦を築く、ただそれだけが、子らに与えられた使命であり、途上で倒れれば次の子がその穴を埋める。感情、しかも理のない愛情という不確かなものに依って、役割を果たせなくなれば、ただの無駄飯喰らいに過ぎない。

――つまり、死んで餌となるがまし、というものだ」

「さもありなん。貴方がたの生態にとって、親子の感情、ひいては愛情すら、何の意味も持たないのですから、理解できるはずもありません。種の存続の有り様、生存の本能、そうしたものから愛情は生まれ出るわけですが、人類種と貴方がたでは前提が根本的に違う。人類種にとって、子は、親たる二人が愛しあい、遺伝子レベルで互いを絡ませあった、一粒の結晶。慈しまない、尊ばない、愛さないはずがありましょうや。愛により生み出され、愛により育まれるのが人類種における『子』の在り方なのです」

無機質であるはずの複眼が、しかし、かすかに顰(ひそ)められたように見えた。
「愛闇梨よ、妾は知りたいのだ。その『愛』こそが、我ら種族を屈服させた最大の要因だというからには」
「概念としての『愛』を知ることはできるでしょうが、残念ながら女王、貴方は真に『愛』を自身の内に見出すことはできないでしょう」
「愛闇梨たるそなたが、『愛』を説けないというのか？」
「無駄で理解し難い、しかし、人にとって尊いもの、それが『愛』なのです。合理的に洗練された貴方の種族の在り方からは最も遠い感情と言えます。私が言葉を尽くしたところで、今この場で、理解に至ることはできますまい。人類種においてすら、真に知り得ているとは言えないのです。数年、数十年、あるいは数世代にすら及ぶのかもしれませんが、それでも貴方が種のために『愛』を知りたいというのなら……」
その一端を体感していただくことはできるでしょう、と田中スバルは立ち上がった。
自分の身長を遥かに超える異形の女王に向かい、彼は距離を縮める。気弱な精神の持ち主では相対することすら厭う威圧感と恐怖感を放つ女王の前にあって、田中スバルは爽やかな風吹く草原を征くかの如く、悠然と愛を散蒔(ばらま)く。
彼の両手が微かに、しかし力強く光を発していることに、女王は気付く。
その光が何を意味しているのかは理解(わか)らないまま、脳裏に鮮烈でいて強烈でいて苛烈、そして果てしなく穏やかな像が結ばれた。
複眼のひとつひとつに満ち溢れ、奔流となって地を満たさんとする、それは――
「……愛闇梨よ、これが……愛、なのか」
「未熟の此の身で伝え得る、ほんの一滴ではありますが」
女王の脳裏に何が浮かんだのか、具体的な詳細を窺い知ることは、女王本人と愛闇梨たる田中スバルにしかできない。
「ただ、それはとても幸福で、心地好いものなのですよ」
――大愛闇梨は私に、そうして穏やかに微笑んだ。
『蟲』の女王は愛を知ることができたのか知る由もないが、彼(か)の種族もいずれ、愛することができるようになるだろう。
大愛闇梨の無辺の愛が、彼らに届いている限り。

Intermission

愛闇梨と呼ばれる者は、田中スバルの他にも少ないながら存在する。
愛闇梨となるには九分九厘までが資質と運、残り一厘が努力。性差や年齢は勿論、種族すら問われるところではない。元は地球の概念であったため人類種がほとんどを占めるが、徐々に多種族の割合も増えつつある。
とはいっても、銀河中において、その数は百に満たない。そして愛闇梨から大愛闇梨に昇格できた者は、長い愛闇梨の歴史の中で、田中スバルたった一人。これまで全ての愛闇梨がそのわずか一段を昇ること叶わず、宇宙に散っていった。
「愛闇梨の資質があるかどうかって、どうすればわかるんですか？」
「どうしたんだい、急に。君も愛闇梨になりたいのかい？」
「いえ、そういうわけではないのですが。貴方や他の愛闇梨は、如何にして愛闇梨となることができたのか、教えてもらえないかと思いまして」
「そうだね。特に秘密にされているわけではないんだが……非常に伝えづらいことではある。端的に言ってしまえば、天啓があるんだよ。そのきっかけは師となる愛闇梨との出会いであったり、瞑想などの修行であったり、事故だったりすることもあるそうだ」
「貴方の場合はどうなんです？」
「私はね……」

田中スバル、14歳の春。
目に映る全てが萌黄色に輝き、手を伸ばせば何もかもを掴めると盛大な勘違いに頬を染めている年頃、彼は愛闇梨に至る道に遭遇した。
「……階段？」
何気なく足を向けた、いつもと違う帰り道。
細い路地裏の行き止まりに見えるその箇所に、それはあった。
「にしては、一段しかない。どこかに繋がっているわけでもない。意味がない……まあでも、乗ってみるわな、こんなの見つけてしまったからには」
そこに山があったら考えるでもなく登ってしまう業を背負った登山家のように、あるいは檻の中から大空を見上げ自

由に恋い焦がれる鳥のように、田中スバルはさらりと一段だけの階段に飛び乗った。
　瞬間、稲妻が迸ったような衝撃が全身を貫き、ビクリと身体を震わせる。
「……ああ、これは……」
「……とまあ、謎の階段に乗ったら、文字通り昇ったわけなんだよ。愛闇梨ランク的な意味で」
「何そのランク⁉　そんなのがあるんですか？」
「いや、ないよ」
「えぇ……」
　大愛闇梨はかつてのローマ法王に準えて聖人君子のように捉えられがちだが、決してそんなことはない。ユーモアもあれば酒も飲むし、カジノに赴くことすらある、実に人間的な存在だ。
「やってみてわかったんだが、私はアツくなる性質だから、賭け事には向いてないね。愛闇梨になる前に賭博に触れていたら、なれていなかったかもしれないよ。そういう意味では、あの年で愛闇梨になってしまったことにも良い点はあったわけだね。なってしまってから数年は、普通の学生生活を送れないことを恨みがましくも思ったものだけど」
「やっぱり望んでなったわけじゃない、という気持ちがあったわけですか」
「それはそうだろう。14歳で急に隠者になれっていうのも無理な話さ。今でこそ運命的なあの出来事は必然だったのだろうと思えているし、まあ、カジノで負けても勝手にチャラにされていることもあるし。普通の人生じゃそんなメリットはないわけだし、そういう時は大愛闇梨の役得を感じるねえ」
「人前では言わないでくださいよ、そういうこと」
「わかっているよ。君も書かないでくれよ、こういうところまでは」
　と笑うところなど、年齢相応のただの男にしか見えない。
　歳相応といっても、大愛闇梨・田中スバルの年齢は、もはや正確に数えることは困難だ。
「宇宙を飛び回っている都合上、コールドスリープや時間操作空間に入っていることが多いからね。精神は時間に支配されないから、精神的にはかなりの歳になっているのだが」
「外見的には30代くらいで止まっているんでしたか。内面と外面の不一致は、貴方の思索に影響を及ぼすことはないんでしょうか？」

「確かに齟齬が出たことはあった。とはいえ、結局差は広がる一方だからね。受け入れられるものだよ」
「そんなものですか。ところで、本当に今の姿って30代くらいなんですか？」
「そうだよ。それは間違いない」
「30代にしては若すぎやしませんか……？　ショタいですよ」
「ギャップ萌えと言ってもらいたいね。時には役に立つんだよ、この姿も」
　――そう、外見が役立つことも、あるのである。

第二部　細雪

「……あなたが、愛闇梨？　本当に？」
　と、眉を顰めた女は、未亡人の喪服が似合いそうな薄幸な顔立ちをしていた。生殖も可能なレベルで地球人類種に近く、二足歩行で男女性があり、異なっているのはちょっと全身が緑色なところくらいなものだ。地球よりも深い森林に地表全土が覆われた恵まれすぎている大地に住まうが故、昆虫のように緑がベースになってきたのでは、と言われている。もっとも、文明の発達と同時に脱色されつつあるそうだ。そうなると、ほぼ地球人類種と変わるところはなく、大銀河連合においても地球と最も近しいパートナーになり得るだろう。
「いやあ、嘘でしょ。ちびっ子じゃない」
「よく言われます。ですが、浅才の身ではあれど、紛れもなく愛闇梨に名を連ねる者です」
「……本当に？」
　にっこりと営業スマイルを決める愛闇梨。こういう時、ショタい外見は反則的な威力を発揮する。そのケがない女でも、時には〝男ですら〟漏れだす愛に打たれ、目にハートが生えるほど。愛を完全に制御しきれていない愛闇梨時代、特になりたての頃には、そうしたことから派生するトラブルも少なくはなかったという。最も大変だったのは、惑星全土を巻き込んだ壮絶な大脱出劇にまで発展したのだとか……。
　女も愛闇梨の発する愛を感じたのだろうか、完全ではないにしろ納得はして、軽く頷いた。
「なるほど。ところで私、愛闇梨に聞きたいの」
　自室のベッドに腰掛ける女は、愛闇梨すら出向かせる出自であることを主張するかのように、ことさら居丈高に振る舞う。無論、そんな些細な挑発で、田中スバルは激さない。